書評

編集・発行
関西大学生活協同組合
組織部
「書評」編集委員会
編集人　原田秀徳

吹田市千里山17
TEL 388－1121
内線　776

「機械文明」の終末について

組織部〈書評〉編集委員会

① 「人類はかって農業社会から工業社会への大転換を遂げた。そして時代はいまや、工業社会から超技術社会」「脱工業化社会」へ展開しようとしている。この新しい社会は「知識文明の全体像」、「文明」の輝かしい成功の社会として、一方で語られながら、他方K・ボールディングは、「この大転換以降に来る社会を『文明後社会』と呼ぶ」のである。

この「超技術社会」「脱工業化社会」というのは、「知識文明」の社会であり、また、「文明後社会」でもあるらしい。そして、この文明社会と文明後社会という点に二〇世紀の〝限界〟と〝未来社会〟の接点がある。

もっと具体的には、いわゆるポスト・アポロの社会が、一方で、知識・科学・技術・情報の社会―これらの産業化にもとずく社会が誇らしげに語られながら、まったく同じ時機に、他方では、知識・科学・技術・情報の限界、危機が叫ばれている点に端的に示されていると言えよう。

この完成、成功と限界、危機の相剋、二極分解とその葛藤のうちに、今日の世界史的転換の要をみるのである。いずれにしても、「現代社会は衆知を集め、個人の潜在能力を最高度に発揮させる方式を模索している。」それは、人類の「知的能力と創造的活動を、無限の空間の中に展開することである」が、この世界史的転換の目標は、どのようにして可能であろうか。

② 「農業社会から工業社会への大転換」は ㋑石炭を動力源として、労働力の中のいわゆる自然的力を人間から解放するとともに、機械制は、諸々の生産用具をつくりだし、人間の手を機械におきかえた。

㋺そして、一九二〇―三〇年代のアメリカとドイツを中心として、石油を活用し、動力源を流動化させることに成功するとともに、飛行機、自動車に象徴されるとおり、人間の体を機械におきかえた。（ベルト・コンベアーと組立作業）

㋩そして現在、人間は、原子力を新しいエネルギー源とし、その巨大な力の流動化に成功しつつある（石油に変わる電化時代）。そして機械の発達は、手から体への転換から、更に、頭、頭脳の機械化にとってかわろうとしている。（コンピューターに代表される、それは今や事務・行政に至る単純精神労働の分野を機械化しつつある）。

㋥こうしたエネルギーと機械の発達は、人間を、生活のための労働から大きく解放する物質的基盤（生産力）を与えるものである。

そして、この労働からの解放と言うことは、それ自体が「衆知を集め、個人の潜在能力を最高度に発揮」させること、「知的能力と創造的活動を、無限の空間の中に展開すること」を意味するものではない点に、今日の基本問題があるのである。

③ 周知のごとく、この資本主義社会というのは、商品経済にもとずく価値形成・増殖と資本にもとずく剰余価値形成・増殖を根本動機とする社会であるし、資本の形成・増殖と、剰余価値形成・増殖の過程が主たる目的となるがゆえに、資本は、エネルギーと機械の発達に実体化された知識・科学・技術・情報を、この目的のために制限されたかたちでしか利用することが出来ないということである。

④ 資本はその効率を上げるために、これらを利用する以上、「労働からの解放」は、その本来の姿を現わすのではなく、現実には巨大な失業者を構造的につくり出さずにはおかない。事実、一九二〇―三〇年以降のアメリカにおいては、この過剰人口、失業者を軍隊として収容しているのである。ここに二〇世紀の限界がある様に思われる。現代は、すでに人間が生活のために労働する時代の終りを示した。然し、人間は、まだよろこびのために労働することの出来る社会をつくってはいない。

関西大学生活協同組合
組織部≪書評≫委員会

1970.1
第10号

＜書評＞もくじ

「機械文明」の終末について　1
組織部＜書評＞委員会

'69 僕たちの意識の周辺　3
書籍部＜書評＞委員会

手記 №1／3 ＜……＞　9

告発された者の自己弁明　14
ひとりの高校教師

ゲバルトの論理と抵抗権　16
ジェリスト「法とは何か」
山根　暲（法ゼミ会員）

新刊・旧刊

「革命の社会学」　19
F・ファノン著作集

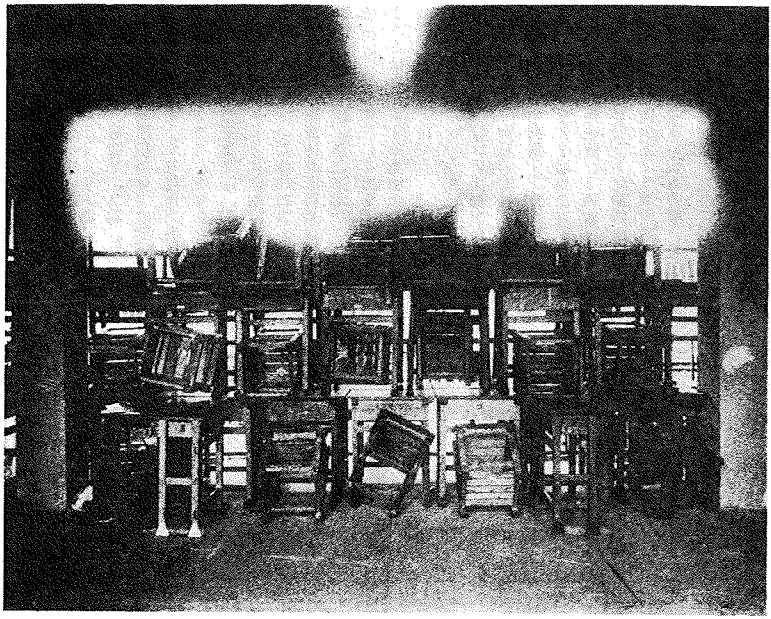
赤頭巾ちゃん気をつけて　20
山下　則子（千里高校）

国際資本戦と日本　22
庵　谷　壽　男

経済生活を動かすもの　23
庵　谷　壽　男

カット写真は「アサヒカメラ」2月号より
＜高校番外地＞渡辺　晞

'69 出版の傾向と思想状況



〝現代〟の根源を問う

「初期マルクス」に関心集まる

69年の情況に、注目をあび出版された書籍、或いは読書傾向と合せてここにすべて網羅することは不可能に近い。が、できるだけ紹介することにした。69年の出版の特色は、現下の情況に真摯に取り組んだ書籍――既制の存立基盤、人間を根源的に、トータルに問う――労作が〝主流〟をしめし、読者傾向もほぼとれに見合っていた。

概観すれば69年＝社会の矛盾の爆発で、〝過渡期〟〝変革期〟と称せられた。政治的闘争のみではなく、戦後民主々義への根底からの問いであり、〝思想退行現象〟の進行と、〈安保〉〈沖縄〉〈大学〉〈革命〉が70年代への構築であったといえる。

造反、解体の学園闘争の全国化は、70年代の政治的課題を背景に緊張した構造を生起せしめる一方社会構造への波及の烽火であった。そこに如実に自己の察省、それは自己の存立基盤そのものへ徹底的に問い直されずにいられなかった。

かかる情況の現代的視点からのマルクス主義研究に注目すべき方向性、問題提起がなされた。

――▽　△――

マルクス・エンゲルスの世界認識の発展過程を検討、鋭い問題提起した広松渉著「マルクス主義の地平」（勁草書房）平田清明「市民社会と社会主義」（岩波書店）、今日の情況を鋭くみつめた吉本隆明「著作集政治評論集、思想家集」（勁草）「国家の思想」（筑摩）知識人論の新たな展開へ折原浩「大学の頽廃の淵にて」（筑摩書房）「危機における人間と学問」（未来社）高橋和巳「憂愁なる孤立」（筑摩）、羽仁五郎「都市の論理」（勁草）、小田実「現代人間論」（筑摩）日本の名著（中公）「ロシア・ナロードニキのイデオローグ」（現代思潮社）ベンヤミン「暴力批判論」（晶文社）フロム「希望の革命」（紀伊国屋）

「日本の名著」（中央公論社）らが注目を浴び、利用者が頗著であった。

小説では、高橋和己、井上光晴、野間宏らがいみじくも69年と、以降の方向性問題性を次のように述べていることに概観は集約されよう。〝70年闘争の渦中で、「政治と文学」という問題を再び取り上げざるをえない。この状況の重さを文学として登場させるためには、闘争自身の意味を問いつめる作業を継続していかなければならず、それには時間の経過も必要〟〝従来の文学イマージュに対する〈解体〉。衝撃が反文学みいたなものとして表出してもいい と思う。――「日本文学」との関係でいえば、従来の日本文学の存在様式に対して――とりわけ秀れた少数の人々をも含むし、そういう人だからむしろそれに向かって批判的な――必ずしも完成度は高くはないが、衝撃的なものを含むという方向〟。

人間存在の根源を問う「高橋和己作品集・日本の悪霊、憂鬱なる党派」（河出書房）「野間宏全集」（筑摩）、異端文学の「夢野久作全集」（三一書房）「江戸川乱歩全集」（講談社）が注目を浴び利用者が多数であった。

その他単行本では「万延元年のフットボール」の延長線に大江健三郎「われらの狂気を生き延びる道を教えよ」（新潮社）椎名麟三「懲役人の告発」（新潮社）庄司薫「赤頭巾ちゃん気をつけて」（中央公論社）、サド「悪徳の栄え」（現代思潮社）らが目立った。

哲学・思想

哲学が根底から問い直されている現代「岩波講座哲学」（全18巻岩波書店）の完結、「実存主義講座」（全8巻理想社）の刊行が行なわれた。更に「オルテガ著作集」（全8巻白水社）「プラトーン全集」（全6巻全国書房）が刊行された。マルクス主義関係では「講座マルクス主義」（全12巻日本評論社）と「講座マルクス主義哲学」（全5巻青木書店）が、マルクス主義哲学を「資本論」との関連で論じた降旗節雄「歴史と主体性」（青木）、先述の広松、平田、他、竹内良知「マルクス主義の哲学と人間」（盛田書店）花崎皋平「マルクス主義における科学と哲学」（同）、コシーク「具体性の弁証法」（せりか）らが鋭い問題提起で注目された。

現象学関係では、シャルダン著作集（みすず）の刊行、デイミェニッカ「現象学と人間科学」（せりか書房）、メロルー・ポンティ「現象学の課題」（同）ポンティ「シュニティ」（みすず）、「瞬間と持続」紀伊国屋）の翻訳も地味ながらも注目され、読者層をつくりだしている。マルクーゼのものも翻訳が続き「文化と革命」（せりか）、マルクーゼ論として城塚登他編「拒絶の精神――マルクーゼの全体像」（大光社）があった。

滝沢克己「現代人の哲学的思惟」（三一）、竹内芳郎「国家の原理と反戦の論理」（現代評論社）、が今日の情況との関連で労作として注目をあびた。それは知識人・人間論の根底からの再検討化への契機ともなり好著として先述の他小田実「日本の知識人」（筑摩）、F・ボン「新しい知識人」（みすず）、津田道夫「知識人と革命」（三省堂）、勝田吉太郎「知識人と自由」（紀伊国屋）、中村雄二郎「言語・理性・狂気」（晶文社）鈴木正「日本・思想史」（ミネルヴァ書房）「日本のマルクス主義者」（風媒社）、小田実編「現代革命の思想」（全8巻筑摩）、阿部知二「良心的兵役拒否の思想」（岩波）、アリス・ハーズ「ある平和主義者の思想」（同）があげられる。

新左翼関係のものは、政治闘争のなかでの政治的位置への関心を惹起させたが、総体的に「全学連各派」（双葉社）などの〝解説〟的であった。藤本進治「革命の弁証法」（せりか）滝村隆一「革命とコンミューン」（イザラ書房）現代史の会編「現代革命の条件」（亜紀）「討論・七〇年をどうする」（田畑）いいだもも「七〇年への革命的試論」（三一）太田竜「日本革命の根本問題」（風媒社）湯浅赳男「トロツキズムの史的展開」（三一）海原峻「既成左翼から新左翼へ」（田畑）同「フランスの新左翼」（合同）コーン・ベンディツ「左翼急進主義」（河出）小田実「ベ平連」（三一）同「市民運動とは何か」「ベ平連とは何か」（徳間）「反戦派労働者」（亜紀）小山弘健編「戦闘的左翼思想とはなにか」らをあげておこう。

戦後民主々義の反省として、竹内静子「戦後民主々義への告発」（亜紀）、多く読まれた羽仁五郎「対談・現代とはなにか」（日評）。

特異なものとして、現下における階級闘争の力学――軍事――への視点として、中村丈夫編「マルクス主義軍事論」（鹿砦社）湯浅赳男「革命の軍隊」（三一）、「中南米のゲリラ」（三一）らがあげられる。

一方、革命の原型質を告知しながらもこれまで教条、修正の語いの呪縛のもとにほとんど一顧の価値もないもののように歴史の暗黒の地帯に葬り去られてしまった理論この空白を埋める作業――現下の情況との位相の根底からの批判的摂取として――F・ファノン著作集（みすず）ローザ・ルクセンブルク著作集新装再版（現代思潮社）、第二期トロツキー選集（同）、ブハーリン著作選（同）バクーニン著作集（同）「コミンテルン・ドキュメント」（同）らが刊行、或いは予定されている。

学生運動関係では「資料戦後学生運

動」（三一）の労作がまずあげられる。たたかう学生の告発書もよく読まれた。山本義隆「知性の叛乱」（前衛社）秋田明大「獄中記」（三一）をはじめ田村正敏「七〇年代学生運動の展望」（同）蔵田計成「安保全学連」（同）などをはじめ、稲垣真美「日大アウシュビッツ」（同）、「増補、叛逆のバリケード」（同）東大全共闘編「砦の上にわれらの世界を」（亜紀）東大林学科集会編「身分世界への挽歌」（同）東大助手共闘編「東大全共闘」（三一）京大新聞社編「京大闘争」（同）安藤紀典「大学革命の原理」（合同）「日本の大学革命」（全5巻日評）全国全共闘（亜紀）など。教官の側からは先述の折原、高橋らの他、滝沢克己「大学革命の原点を求めて」（新教出版）井上清「東大闘争の事実と論理」（現代評論社）藤本・滝田「反大学七〇年戦線」（合同）大学改革研究会編「世界の大学改革」（亜紀）野村修「暴力と反権力の論理」（せりか）。

安保体制の焦点――沖縄について資料集として特筆すべきものとして、戦後沖縄の政治的運動的な原資料で総合的にとらえた中野好夫編「戦後資料、沖縄」（日評）、新崎盛暉編「ドキュメント沖縄闘争」（亜紀）があげられる。他に石田郁夫「安保、反戦、沖縄」（三一）「沖縄、土着と解放」（合同）新崎盛暉編「沖縄返還と七〇年安保」（現代評論社）安保・沖縄問題研究会「七〇年安保と沖縄問題」（労働旬報社）福島要一「安保条約と沖縄問題」（同）、吉原公一郎「沖縄―本土復帰の幻想」（三一）などがあげられる。

安保条約では、潮見俊隆他「安保黒書」（労旬）、渡辺洋三他「日米安保条約全書」（同）、朝日新聞社編「七〇年安保の新展開」、毎日新聞社「安保と米軍基地」などが広範に読まれた。

心理学関係では、「講座心理学」（全8巻東大出版会）が刊行され、荻野恒一「現存在分析」（紀伊国屋）E・ジョーンズフロイレの生涯」（同）。

E・フロム、マルクーゼの先駆をなす人間・社会解放――性社会学――の圧殺された理論、W・ライヒ「性と文化の革命」（勁草）が発行、注目をあびた。

社会学

ウェーバからミルズまで社会学の名著を集成し注目をあびた企画日高六郎他編「現代社会学大系」（全15巻青木）が刊行されはじめた。

ウェーバの翻訳では「ロシア革命論」（福村出版）、書誌的では安藤英治他編「マックス・ウェーバーの思想像」（新星社）。

ウェーバーを唯心論的主観主義化傾向と批判した細谷昂「社会科学への視角」（汐文社）、田口富久治「社会集団の政治機能」（未来社）中野卓「家と同族団の理論」（同）、鈴木二郎「現代の差別と偏見」（新星社）竹内利実「家族慣行と家制度」（同）エイヤー「コミュニケーション」（みすず）田中靖政「コミュニケーション」（日評）。

世界の名著の翻訳デュルケム「人類と論理」（せりか）があり、更にパーソンズ編「現代のアメリカ社会学」（誠信）ダニエル・ベル「イデオロギーの終焉」（東京創元社）リースマン「日本の文明」「現代文明論」（みすず）「現代文明と科学」（法大）ミルズ「社会学とプラグマティズム」（紀伊国屋）があり、地味ながら、注目をあびた。

松原他「社会学の基礎知識」（有斐閣）は、社会学の領域を要領よく〝紹介〟し、利用者が多かった。

経済学

経済思想史分野では、マルクス主義の再検討した降旗節男「歴史と主体性」（青木）山之内靖「マルクスエンゲルスの世界史像」（未来）広松渉「マルクス主義の地平」（勁草）「エンゲルス像」（盛田）、平田清明「市民主義と社会主義」（岩波）があり、広松、平田らの著作に利用度が集中した。他に水田洋「アダム・スミス研究」（未来）住谷一彦「リストとヴェーバー」（同）大塚金之助「ある社会科学者の遍歴」（岩波）。

経済史では〝大塚史学〟といわれる「大塚久雄著作集」（岩波）の刊行がはじまり利用度は高い。経済史的諸現象の基礎的な検討―著者はイギリスを起点とし近代社会の基本的骨組である資本主義構造連関の成立を探索しつつ、社会的原動力の契機――「人間」の実態――近代社会のいなとみを全面的に包摂する著者の〈社会科学〉が形成される。マルクス、ウェーバーと類比される意味で〈比較社会構造論〉で、著者自身との集大成への構成の補填と系統づけがおこなわれている。

荒井政治「近代イギリス社会経済史」（未来）福島正実「アジア的生産様式論争の復活」（同）、大塚史学への批判として大谷瑞郎「経済学史批判」（亜紀）出口勇蔵編「経済学史入門」（有斐閣）翻訳ではシュトルパー他「現代ドイツ経済史」（竹内書店）コスミンスキー「イギリス農業史とロシア学派」（未来）などがあげられる。

マル経としては、〝宇野理論〟の啓蒙的色彩の濃い宇野弘蔵「資本論の経済学」「マルクス経済学の諸問題」（岩波）「社会科学としての経済学」（筑摩）があり、とりわけ「資本論の経済学」を主に利用が集中した。鈴木鴻一郎編「マルクス経済学」（東大）。宇野理論」による現状分析の方法について問題提起した馬場宏二「アメリカ農業問題の発生」（東大）、国家独占資本主義の解

明への鈴木鴻一郎編「アメリカ資本主義年表」（東大）大内、大島他「日本資本主義の没落Ⅷ」（東大）。労働価値の中心問題である生産価格論を学説史的に、金融資本と国家との関連性を論究した桜井毅「生産価格の理論」（東大）。マルクス主義労働市場論として竹中恵美子「現代労働市場の理論」（日評）、他に岩田弘「マルクス経済学」（盛田）越林信三郎他「独占資本 論人の道」（同文館）「日本の独占企業」（新日本出版）佐々木晃「価値論の方法論的諸問題」（日評）、星川順一「価格体系と経済機構」（新評論）小椋広勝編「現代資本主義の循環と恐慌」（岩波）中林道義「株式会社論」（亜紀）大内力「日本における農民層の分解」（東大）西山武一編「農業構造と農民層分解」（御茶の水）管沼正久「協同組合経済論」（日評）、越後和典「寡占経済学の基礎構造」（新評論）百々和「現代資本主義と寡占経済」（東洋経済）大谷竜造「景気変動の理論」（同）末永隆甫「近代経済学の形成」（ミネルヴァ）三上隆三「近代利子論の成立」（未来）。長砂実「社会主義経済法則論」（青木）

金融関係では、国際通貨の変動と危機、資本論の激化七〇年代の国際資本戦の動静を背景に、江夏美千穂「国際資本論と日本」吉野俊彦「資本の自由化と金融」（岩波）が読まれた。鈴木金三「銀行行動の理論」（東洋経済）鎌倉昇「日本の金融政策」（同）などがあげられる。

国際経済では、松井清「戦後の世界経済」（日評）クチンスキー「世界経済の成立と発展」（評論社）川口侃「アジアの挑戦」（東大）同「軍事経済と平和研究」（同）、安井孝治「国際通貨制度改革論」（東洋経済）レイトン他「現代の国際投資」（岩波）新開陽一「国際経済論」（筑摩）。

翻訳関係では、末永茂喜「リカードウ全集」（雄松堂）フェインステーン編「社会主義・資本主義と経済成長」（筑摩）スウイージー編「論争マルクス経済学」（法大）、ホブズボーム「共同体の経済構造」（未来）ドラッガー「断絶の時代」（ダイヤモンド）などが注目された。

政治学

レーニンのソヴェト政治体制のリヴァイサアン・畸形化の方向への逸脱化への阻止の最後の闘争を、社会主義権力の問題をえぐったM・レヴイン「レーニンの最後の闘争」（岩波）が好評。他、スウイージー「キューバの社会主義」宮田光雄「現代日本の民主々義」笹本駿二「第二次世界大戦前夜」ラバポート「現代の戦争と平和の理論」内田健三「戦後日本の保守政治」（岩波）があげられる。

柴田高好「国家の死滅」（川島書店）は自己否定の政治学、松下圭一「現代政治の条件」（中央公論）京極純一「現代民主政治と政治学」（岩波）Bクリック「政治の弁証」（同）升味準之輔「現代日本の政治体制」（同）井上清「大正期の政治と社会」（同）が注目される。

歴史学との関係では、近代ドイツ、ロシア革命、中国、をめぐる研究書が目立った。F・メーリング「ドイツ社会民主々義史」（ミネルヴァ）アーベン・トロート「ドイツ社会民主党史」（同）上林貞治郎「ドイツ社会主義の成立過程」（同）上杉重二郎「ドイツ革命運動史」（青木）ローゼンベルグ「ヴァイマル共和国成立史」（みすず）ハルガルテン「ヒトラー、国防軍、産業界」（未来）ユーザー「ヒトラー」（紀伊国屋）。

ロシア革命をめぐっては、立体的総体的な編集江口朴郎編「ロシア革命の研究」（中公）。特異な近代化論のラウェ「ロシア革命論」（紀伊国屋）ウルフ「レーニン・トロツキー・スターリン」（同）、ロシア革命の結果への「歴史」からの問題提起E・H・カー「ロシア革命の考察」（みすず）。M・ヴェーバー「ロシア革命論」（福村）があげられる。

中国関係では、中国思想史の通史として、岩間一雄「中国政治思想史研究」（未来）小野川秀美「清末政治思想研究」（みすず）。丸山松幸「五四運動」（紀伊国屋）山口一郎「現代中国思想史」（勁草）など思想史も、中国の変革期に焦点をあてたのが目立った。文化大革命を中心とする真摯な中国革命研究、西順蔵他編「講座現代中国」（全3巻大修館）、新島淳良「新しき革命」（勁草）同「毛沢東の思想」（同）藤村俊郎「中国社会主義革命」（亜紀）、中西功「中国革命と毛沢東思想」（青木）などと共に山田慶児「未来への問い」（筑摩）は現代中国を理解する上で、新たなる視座を提出している。

朝鮮問題に取り組んだ旗田巍「日本人の朝鮮観」（勁草）中塚明「近代日本と朝鮮」（三省堂）があげられた。土井正興「スパルタクス反乱論序説」（法大）イギリス市民国家論の若松練信「ブルジョア人民国家論の成立」（亜紀）、カウッキー「トーマス・モアとユートピア」（法大）も重厚な論究が刊行されたが読者は限定されるが少なかった。

リサガレーの名著「パリ・コミューン」（現代思潮社）モルネ「フランス革命の知的起源」（勁草）がある。世界史では「岩波講座世界歴史」（全30巻）が新しい世界史像を提供しようと刊行された。

現代における脱国家化と現代日本の位相を示す小田実編「脱走兵の思想」（太平出版）。

法律学

〝家永裁判〟は憲法問題として大きく

クローズアップされたが、「家永・教科書裁判」の証言篇・準備書面篇がひきつづき出版された。憲法問題では、東大社研の共同研究「基本的人権の研究」（東大）が原論として注目され、宮沢俊義「憲法と天皇」「平和と人権」「憲法と政治」（東大）がある。東大闘争弁護団「東大裁判」（田畑）などが特筆される。が、ジュリスト「法とは何か」の類がよく読まれた。

文芸評論

「野間宏評論集」（未来）が刊行され、サルトル文学理論との〝対決〟しながらも、独自の全体小説理論への構築を志向した「創造と批判」（筑摩）「全体小説と創造力」（河出）「全体小説人の志向」（田畑）が目立った。

外国文学者が専門の外国文学と日本文学を関連させながら現代文学の状況を突破しようとする平井啓之「文学と疎外」（竹内）川村二郎「限界の文学」（河出）鈴木道彦「アンガージュマンの文学」（晶文社）があげられる。現代文学でいちばん大きな問題点になっている言葉・言語について中村雄二郎「言語・理性・狂気」（晶文社）「言葉・人間・ドラマ」（講談社）。人間科学と哲学の結節点としての言葉の問題を提起した。

磯田光一「比較転向論序説」（勁草）「戦後批評定論」（河出）「正統なき異端」（仮面社）の三著を刊行し、批評家への視点が特異。

江藤淳「崩壊からの創造」（勁草）は、現代の日本の精神状況と関連させながら江藤独自のロジックを駆使した評論集も好評。

存在論的文学観の展開として、日野啓三「虚点の思想」（永田）「幻視の文学」（三一）があげられる。その他森川達也「虚無と現代文学」（洛神書房）。吉田透「芸術の理路」（河出）。

作家論では、野村修「プレヒト・ノート」（晶文社）、遠丸立「吉本隆明論」（仮面社）野口武彦「三島由紀夫の世界」（講談社）同「石川淳論」（筑摩）中井正義「梅崎春生論」（虎見）渡辺広士「野間宏論」（審美社）「針生一郎評論集」（田畑）。

詩人からの評論集「栗津則雄評論集」（思汐社）大岡信「蕩児の家系」（同）渡辺武信「詩的快楽の行方」（同）。

海外文学関係では、〝想像力なき思想家よ去れ〟と、強烈な歴史意識のベンヤミンの「著作集」。〝言葉〟の「パヴェーゼ著作集」（晶文社）の刊行がはじまり、ポール・ニザン著作集とともに読者層をつくりずしている。

教　育

教育表の分野では、大学闘争の展開によって〝教育〟の虚構性があらわになったが大学闘争の政治、経済的次元でしか問題が出されただけで、〝教育〟への真摯な探索が少なかった。

先述した折原浩の二著、更に大学闘争の項であげた著作を除いてあげる。

全集関係では「講座現代民主々義教育」（全5巻青木）戦後の民主教育理念の体系化、「近代日本教育論集」（全8巻国土社）は明治以降現代までの重要な教育論文の網羅して教育・児童・教師像を再検討への提起。

教科書検定問題に関しては、家永三郎「教育裁判と抵抗の思想」（三一省堂）「家永教科書裁判」（総合図書）大槻健也著「教科書黒書」（労句）

国際的視野からまとめあげた五十嵐良雄「国際教育論序説」（現代評論社）。日本の歴史の推移とその特色をふまえ、教育のあり方の長所、短所を指摘した永井道雄「近代化と教育」（東大）、池田進、日本教職員組合員編「日本の教育」（一ツ橋）「現代教育への視点」（福村）。

その他の研究書中野光「大正自由教育の研究」（黎明書房）高橋磌一「歴史教育と歴史認識」（青木）渡辺学「近世朝鮮教育史研究」（雄山閣）。

教育についての原理的な解明への八仮説実験授業／一板倉聖宣「科学と方法」（季節社）

歴史学

古代、中世史に重厚な研究書の刊行に目立った。石尾芳久「日本古代天皇制の研究」（法律文化）原田大六「邪馬台国論争」（三一）小林行雄他編「古代の日本」（全9巻角川）、太田他「古典古代の社会と思想」（岩波）菊地康明「日本古代土地所有の研究」（吉川弘文館）林陸明「上代政治社会の研究」（同）門脇禎二「大化改新論」（徳間）、脇田晴子「日本中世商業発達史」（御茶の水）など。

安藤城盛昭「歴史学における理論と実証」（同）近代史関係佐々木潤之介「幕末社会論」（塙）伊藤隆「昭和初期政治史研究」（東大）松本三之介「天皇制国家と政治思想」（未来）平重道「近世日本思想史」（吉川弘文館）古田光也「近代日本社会思想史」（有斐閣）隅谷三喜男「日本の社会思想」（東大）しまねきよし「民権思想と転向し」（紀伊国屋）「転向――明治維新と幕臣」（三一）の〝転向〟への新たな視角の二著。飛鳥井雅道「幸徳秋水」（中央公論）色川大吉地方運動の典型民権家「村野常右衛門伝」（中公事業出版）鈴木正「戦後日本の史的分析」（青木）「日本思想史の遺産」（ミネルヴァ）鶴見俊輔編「語りつぐ戦後史」（思想の科学）、清新な問題意識の同志社大人文研編「戦時下抵抗の研究2」（みすず）。江口朴郎「帝国主義の時代」（岩波）井上清「日本帝国主義の形成」（同）が注目された。

辺地の暗がりに引ずりこむ、森嘉兵衛

「日本僻地の史的研究」（法大）

都市、公害問題関係では、わが国ではじめて「公害白書」（大蔵省印刷局）がだされ、「住民の公害白書」（社会新報）が刊行されその緒端へ注目に値いする。公害行政の領域からアプローチした佐藤竺編「公害対策1・2」（有斐閣）アメリカ科学アカデミー編「公害事典」（日評）、天明佳臣「都市の断面」（三省堂）、庄司光他著「恐るべき公害」（岩波新書）

化学関係では、田中豊助「遊離基の化学」（岩波）ガルウェイ「固体の化学」（広川）フィンケルシュティン「純粋物質を求めて」（東京図書）桜田一郎「高分子化学とともに」に生物、化学兵器への関心が惹起され、久保綾三「BC兵器」（三省堂）和気朗「死をよぶ科学」（新日本出版）の二著がある。

物理は、物性物理学と素粒子の探求を中心にした井上健編「物理学のすすめ」（筑摩）、湯川秀樹「素粒子二版」（岩波）E・フェルミ「素粒子」（東京図書）ケレル「世界を変える物理学」（同）太田時男「近代物理学」（塙）など。川口正昭「素粒子論」（共立）

数学では、梅沢敏夫「現代数学と初等数学」（共立）、赤塚摂也他編「数学のすすめ」（筑摩）フルギン「数学道しるべ」（東京図書）ユルモゴロフ「数学を学ぶ人のために」（同）、都築卓司「四次元の世界」（講談社）

生物は、オパーリン「生命の起源」（岩波）ビートル「生命のことば」（みすず）飯島衛「生物学と哲学との間」（同）八杉竜一「進化論の歴史」（岩波）など。

建築関係では、美術出版社より現代建築家シリーズの刊行、ヴェンチェリー「建築の複合と対立」鹿島出版会より田畑真寿「住環境の理論と設計」井上充夫「日本建築の空間」、彰国社より「建築学大系」の刊行、山本学治「日本建築の現状」など。電子計算機関係では三十以上を越える出版がなされ〝ブーム〟を特色付けた。

（書籍部〈書評〉編集委員会編）

原典で捉える日本の思想

岩波書店

日本思想大系

全六十七巻

一、日本の思想史の展開の上で重要な意義をもつ古典的著作・記録類を網羅した。
二、体系的思想家や思想書が軸になってはいるが、既往の類似叢書が触れることの少なかった民衆の思想や意識をも解明するため、その資料的文献をも積極的に収録した。
三、多様な問題意識をもつ読者の、それぞれの立場からする探究・検討・例証に資しうるように、収録文献の選択はあくまでも客観的に行なわれた。
四、専門研究者にとっても現在入手が困難とされている本を、なるべく収録するようにした。

A5判・クロス装上製函入・平均五五〇頁
毎月一冊刊行予定
予価各一三〇〇円～一五〇〇円

5月配本開始予定
第一回配本 第十二巻 道元 上
定価一三〇〇円

岩波書店
東京都千代田区一ツ橋2—5—5振替<東京>26240

手記 No.1 〈……〉

手記 No 1

〈……〉

自己の現在の状況を少し書いてみよう。

大学に残るとは一体何のことか。現在の大学院とは何か、を考えることもなく、ただ実存の間主観的〝関係〟を研究するために、時間論を中心テーマにしようと思っていただけであった。しかし、大学についての根源的な問題が提示されている現在、そのような態度でよいのだろうか。大学院そのものについてどう考えて入学したのだろうか、という自己自身への疑問が起って来た。

大学院と学部とは、どこが異っているのだろうか、単なる学生と教育者との中間存在であり、その点では学部を越えるものではない（助手になることの出来る者としては学部卒業でも大学院卒業でもかまわない）それでは大学院としての独立した一つの位置づけが出来ないのだろうか。大学院とは一体何をする所なのか。研究機関であると言われているが、現在の大学院が研究機関であり、院生が研究主体となっているだろうか。そうではなく、自己の利益追求の手段としての職業訓練所と化してしまっているではないか。そこにおいては職業人的な性格を持つ教授の研究下請け機関であったり、教授に対するゴマすり院生の活躍の舞台でしかない。徒弟制度は確立しているのである。研究することが、そしてその成果が、認めてもらうための手段でしかなくなった所に、真の研究機関としての大学院は死滅してしまっている。

では大学全体はどうであろうか「大学自治とは教授会自治である」などと言った人がいたが、大学教授とは一体何か。彼の研究とその成果が彼の教育者としての職業に利益をもたらすものであり、それを基に自己の地位を創り、それを守るためには他の説を排除し、仲間内では議論をさけ、なれ合いの平静を保ち、タコツボのような講座や教室によって生きている。このような教授が、教授会という集団を作って、自己の地位保全を目標として動き、時には「ハジもガイブンもステテ」立ち上がり、学生を、院生を、また対立する新学説を弾圧している。

学部は、大学卒の証明書を取ることと、資本に対して自己を高く売るための人身売買にそなえての職業訓練所でしかない。このような大学はけっして人民に対して責任の持てる真理追求の場として、現社会全体に対する批判など出来ないばかりか、社会――その社会というのも、人間性を基礎としたものでなく、人間を生産の一材料とする立場を基礎とした人間無視・利益追求のための価値観に

よって成り立っている産業社会でしかない――に認めてもらうためのものでしかない。産学協同による資本と労働の中間管理者や事務処理者または技術者養成所といった所がせいぜいである。このような現在の大学は人間性を抹殺し、産業体制の一部分へと人間を改造する機構として存在しているのでしかない。このような機構の一員になるために残った院生（私）とは、すでに人間性否定の内に在る。この自己否定して行こうとするのが、今の学生運動である。そこに言う大学解体とは、このような機構の否定ということである。

大学とか、または別種の研究機関とかが、現在の資本主義・人間管理体制内に存在するかぎり、利益追求、人間性無視の価値観の保護者の役割をになうものである。これをのがれる方法はないのであろう。もし今の大学機構が学生、教職員組合によって構成されるようなものになっても、体制内合理化でしかあり得ない。その卒業生は社会の人間管理となってゆく他ないのである。では一体、全ゆる現実の矛盾と、人間の人間による非人間化を批判する場をつくるには、どうすればよいのか。このような根源的問いを無視して、政府は「大学立法」を全く言葉に出来ない権力的な方法によって通過させてしまった。このような現在、自己を No Retern Point に立たせて、この「大学立法」と対決してゆく以外ない。

手記 No 2

＜現実の眼前＞

一つの報告とするにはあまりにも内容の貧困さを感じるのだけれど、貧困であればあるなりに、その貧困さを述べたいと思う。

私は途中幾度断念しようかと思ったかもしれない。それは同じ書くのならより以上にという意味で良いものを、そして高い理想を掲げたその努力でなければいけないような、そんな錯覚と高慢さに支配されていたからである。実際のところ、沈黙を守るべきだったような気もするのであるが……。

とうてい乗り越えられないような現実の二重生活というものがあるように思う。

次の山本義隆氏の一文章が示しているようなものである。つまり、「10・8にショックをうけ、第二次羽田やエンプラ、王子、三里塚のあわただしく激しい闘争のたびごとに、駆り立てられるように学生諸君の後からついてゆき、それでいて研究室にもどれば、忘れたように物理の本を読み、計算もすれば論文も書くという、ふっきれない二重の生活を器用にバランスをとっていたのが、その当時の私でした。」（朝日ジャーナル、6・29号）このような二重生活の器用なバランスは、現役の学生諸君のみならず、否々正にその私自身を含めた卒業生というものの実体ではないだろうか。土曜日の午後、関大全共闘のデモ隊の中でシュプレヒコールする私自身は、何と奇妙な存在なのだろうかと。

うしろめたさと言えば、関大には闘争など起り得ないという観念があったからである。これは理由はどうあれ、私自身が在学した時代の意識の浅薄さと、革命的なものの理想像とが明確でなく幼稚なものであったということだ。疎外のテーマにもかかわらず、それが実質的には疎外論の域を出なかったということではないだろうか。頭でっかちの疎外論、山本義隆氏の述べているような二重生活の器用なバランスである。もっとも知る人ぞのみ知るのであろうけれども。

更に二重生活の器用なバランスは、大学と学問という問題を提起しているように思われる。一方では大学解体への行為と共に、他方では真に学問すべき空間としての大学創造への意志である。この二つの意志は、自己という主体において同時に行為として表わされようとするが故にディレンマとして感じるものである。真に学問とは何か、また学問の目的とは何か、という問をあえて避けて通るが故に想起する生活のアンバランスである。然り、問いかけの方法はどうであれ、学問とは何か、そして哲学とは何か、とは真剣に答えられねばいけない。

しかしながら、赤面をもって私には何ら答えることができないことを告白しなければならないのであるが。

なお一つ、奇妙な存在ということは、アウトサイダー的立場を超えられないという点である。このことは、次のような課題を提することになるだろう。

第一に関大闘争というものに対してはあくまで外部的立場にあるということ。つまり、その実質的行為においては、うまくいっても間接的以上のものであり得ないということだ。意識のないままには無関心的立場なのであるが、意識ある者としても、全共闘の意図するところと私としての個人は、その全体的な個人となる場合、超えられないような深い断絶がある。これは現実に、もはや大学人ではなく、職場人であるという意味におけるものである。このような断絶の課題は、次に連帯性への可能性というものへと押し進めるように思う。あれかこれかの余裕ではなく、ここではいかに可能であるかという真剣な問、やるのかやらないのかの切実さである。ここにおいても、やはり迷路に陥ってしまう。

現生活において確かに乗り越えられないように思われる幾つかの弁解がある。

しかし逆に今年が七十年安保の前年という意味においてであるのか、各学校PTAなどで安保問題がとりあげられている。ある母親大会では分科会のテーマに、①子どもの教育と安保 ②生活と権利の問題と安保 ③独立と平和と安保 ④母親運動 というふうにである。まるで安保の中元大売出しの如くではあるが。「子供から安保について聞かれても知らないではすまされなくなった」「台所の問題もつきつめていくと安保につながってくる」など母親たち自身の希望からでてきたものだそうだ。だが、これをチラッと耳にしただけでは、真に安保というものについて考え得るのだろうかと疑問に思うのである。安保ムードによる安保論ではないのかという疑問である。問題の意識化というものは、各人が何らかの形で直面した正にそこから起ってくるものであるからだ。

10・8羽田は理論による行為であった。10・8羽田以降は直面の闘争の拡大であった。この意味は、原潜デモに対する若い従業員の感想「本当はこんな商売をしているので言いたくないんだが」という前置の言葉に無意識の内に含まれているものである。つまり原潜デモと称するようなものがなければ、決してこの従業員は「言いたくないんだが」とは言わなかっただろう。デモによって、この従業員は「あのデモを見ると、本当はぼくも入りたくてしようがない、が、商売のことを考え我慢しているのですよ」（朝日ジャーナル、6・29号）とつけ加えるに至るのである。米軍基地に対する不満が次第にふくれ上がっているのは事実であるが、自己のささやかな生活の利益を守るため、結局は利益の側につく小市民的存在である。この結局は利益の側につくという立場は、実際現今の我々自身の社会的立場であるといえる。佐世保、三里塚、王子、立川等々の市民運動の原動機は、直接彼らが体験してきたもの、彼らの生活を守ることから出発したのだ。この意味において、いかなる優秀なる理論の危機感からではなく、平和への願い、自己の疎外されている現実から起るものである。反戦運動というものは直接的な危機感というものから出発するものでなければならない。むしろ理論は後から追いかけてくる。

危機感が人間の思索と行動のバネではあるが、実際のところ危機というものはいかに感得されるのだろうか。

八月六日が近づくにつれて毎年新聞に一行事のように掲載されるものに原水禁運動がある。原水協（共産党・中立系）原水禁国民会議（社会党・総評系）、また核禁会議（民社党系）等々と独自の大会開催が準備されている。朝日新聞（七月二三日社説）で「このような原水爆禁止運動分裂の経過は、日本の政党の未熟さ、特に政党と大衆団体の関係における政党のエゴイズムという問題を、余りにも赤裸々に国民の前に示した」とある。まさしく我々自身が選んだ有名無実の現実日本の暴露である。更に衆参国会の駆引等、また日米経済委における沖縄返還問題、貿易経済関係（自由化）等々にもうかがわれるように、その実質戦後日本の占領下の域内である。良きパートナーという美句名文におだてられたりけなされたりしながら。

ところでオヤッと思われるようなものがある、かって私も決して起りえないだろうと考えていたキリスト教団（日基）の内部において闘争が呼号されていることである。同志社、関学の関西二大神学校がバリケード封鎖され、神学や教会の解体も叫ばれているということ。その契機は万国博のキリスト教館建設に拠る。信教の自由、伝道の側面的問題のとらえ方、安保闘争抑制手段としてのものである。的を得た詳細な批判は述べられないが、「キリスト教の問題をキリスト教のみの領域において再解釈するという方法を批判して、歴史と現実の総体においてとらえるべきだ」という主張（朝日新聞八月二日）。このような問題はキリスト教会自体、常に自己矛盾として内部にもっていたものである。歴史と現実の総体におけるキリスト教会という具体的なものの論理と構造は課題として残されているけれど、確かに一歩前進的であるといえないだろうか。「おのれの内面的自由個人主義的自由を外的・社会的なものによる侵害から防衛しようとする」（黒田寛一、現代における平和と革命 P20）二重生活、この自己分裂、この自己矛盾への意識が危機感である。「彼らは、危機の根源を現実的なものへ求めようとはしない。傍観的逃避的に、もっぱら孤立的個人の内面的自由を主観的にとりもどそうとあえぐ」（同前 P21）のである。平和憲法があるにもかかわらず、若い従業員や佐世保のホステスのように、我々もまた、実質的には米帝国の占領下に、物理的にも精神的にも服さざるを得ないのだろうか。より具体的に言うなら、ブルジョワの資本と純正への妥協においてしか、現実の今、我々は〝めし〟を食うことが許されないのだろうか。また、そういう範囲においてのみより、自由は与えられないのだろうか。即ち主観的私利的な自由を。我々のささやかな趣味「どういう因果か知らないけれど、生まれてきたのだから生きてみるか……」というぐあいに。

我々が商品自体であることがイヤになったら、商品であることを止めなければならない。しかし、主体性があるにしろ、ないにしろ衣食住への貪欲という材料費の非常に高い商品である。否、現在我々につき込まれる材料費以上に高価な

機械の方が多いのではないか。むしろ「私は機械になりたい」とも言いかねるほどに。

現代における危機とは。人間が人間でないような状況、人間性喪失の状況である。物理的貧困が精神的貧困を導き、また、逆に我々自身におけるように精神的貧困さが物理的貧困へと導く。

ベトナム撤退に関する朝日新聞の一説に「しかし、そうした残酷兵器で大量殺人をするアメリカ兵自身にとっても、これは長い戦争だった。一人一人はアメリカのやはり民衆なのだ。カレンダーを一日ずつ塗りつぶしながら、帰国を待ちわびつつ戦う米兵たちにとって、この〝撤退開始〟はどういう意味をもつのだろうか。なんのために戦場に行き、なんのために撤退するのか。とくに死体となって撤退する米兵にとってこの戦争は何だったのか。彼らに殺傷されたベトナムの民衆のみならず、彼ら自身もまた〝犠牲者〟だったのではあるまいか」と。これは前者における貧困さである。なぜなら、この黒人アメリカ軍曹の直接参加動機は、白人と平等でありたい以上に、妻子や母親の生活を守ることにあったからだ。彼が戦場へ行くことによって高額を得るためである。例えば戦闘手当、家族手当であり、満期で退役すれば大学や職業学校へ通う学費援助、家が必要なら特別のホーム・ローン制度というぐあいにである。後者においては二重生活として指適してきたものである。資本家によってすっかり飼いならされ、さく取されているのだなどとつぶやきながらも、このことに保守的になっている貧困さである。

この環状線のような自己矛盾、しかしながら、なお一歩進んでみよう。

「現代とは、われわれの観点からすれば、プロレタリア世界革命がただ単に実現されるべき目標としてではなく、同時にその実現がさしせまった現実問題として登場した新しい世界史的段階のことである。政治経済構造の観点からいうならば、それはうちたてられた労働者国家という新しい社会体制と死滅しつつある資本主義体制への分裂と敵対は、まさに現代がプロレタリア世界革命の完遂への過渡期であることをしめすものにほかならない。国家プロレタリアートの主体性と指導性とが現実的に確立しはじめたこと、ここにはじめて、現代世界の危機が全面的に危機として登場してくるのだ。」（黒田寛一、同P46）しかしなれば共存路線によって、一般危機意識なるもののインペイされていたものが、主体性によって根底からくつがえされるからである。ここに権力介入の横暴性が現実にムキ出しにされる。

「われわれは真理を求める。公認の真理には反対する。われわれにとって真理の追求と同義であり、この両者は不可分である。自由は贈り物ではない。課題である」（朝日新聞、七月二八日、チェコ文化人宣言）また、「競争的、敵対的人間関係における自由とは、掠奪的、排他的自由なんであって、そこには人間の共同体というものは存在しない。」「そういった排他的な人間関係を……共同体の中の個人としてどう回復していくのかということが、ぼくらの全般的な目標だと思う」（山本義隆〝はてしなき我らが闘い〟、潮）今国会で見せつけられてきたように、何とも恥さらしの実質抜きの審議、また、審議抜きの強行採決など、もはや大衆意志なども毛一筋ほども真剣になって扱われていないのだから（今までもそうだったが）我々自身の手と力を頼る他はあるまい。

そして、ここに単に自己のささやかな利益と自由を守ることによって、敵にもなれば味方にもなるというような態度とおさらばすべきではないか。確かに我々は資本家の資本そのものによって今飼われているのだけれど、我々自身の人間性も売り渡してはならない。

実にささやかながらの抵抗、我々自身が大衆労働者の一員と自覚することだ。それも超一流の労働者となることだ。このことは、行為と共に常に課題として残るけれど、否残されているのだ。

また、大衆学生の一人として存在することだ。そしてこの場合、大衆ということに少なからず当惑しないで言えることは、私自身のレベルにおいてのみである。

手記 No 3

＜先生へ＞

私は大学が好きです。大学院が、そして関西大学というもう〝一つの家〟が。私は家出などしたくはありません。時間（とき）。自由でそして時には、僕だけの自由な時間（とき）。人間らしい心の触れ合い。どうしてこんな住み心地の良いはずの家を出なくてはならないのでしょうか？　とんでもないことです。ただこの家に住むには、一つの条件があります。自分の志向する対象への飽くなき追求という情熱・意志。これがないと、せっかくのパラダイスも、自分で放棄しなくてはなりません。ところがです。現在の関西大学は、私の、そして先生方のもう一つの家は、真にパラダイスと言えるでしょうか。地獄の如きパラダイスと。私にとって、私の友人達にとって、そして先生方にとって。〝パラダイスだ！〟と胸を張って言える者は、一人もいないでしょう。何故でしょうか。時間（とき）は確かにあります。コーヒーやお酒を飲むお金もないとは言えません。しか

し最も肝心なものがないようです。心の触れ合いという、人間であれば、誰でもが必要とし、それ故に、最も人を魅惑するものが。何故でしょうか。人間というものは、全く平等であるはずなのに、何か学生は先生という人間を、雲上人の如くに無意識のうちに意識し、また、先生方も先生方の方で、学生というものを、「教えてやるのだから、黙ってオレの言う通りに従ってついて来い！」式に思われているからではないでしょうか。

話をもう少し具体的にかつ、僕個人というものを踏まえながら進めて行きますが、――

僕は生来の勝手な、あるいはわがままな体質のためか、それとも俗に言うところの〝坊ちゃん気質〟のためか、何か一方的な制約というものが苦手です。ですから、そういうものがあると、時には感情的に反発を行ないます。ただ大学という場に身を置くからには、当然『授業』ととという制約を受けなくてはなりませんが、今述べました理由とはいささか成り難い理由の他に、もう一つ現状の授業の真の有効性を認め難いことも事実です。それは、先生方もあるいは、お気付きかもしれません。しかし、そうは申しましても、私が、決して間違った考えではないと確信しています大学院の授業＜すなわち、月一度学生と先生が集り、その年に採り上げたテキスト（これも、両者の合議によって決定される事が理想的です）を基に、一つのテーマを選び、各々が各々の方法で、個人的に先生のもとへ、その進め方を質問に行きつつ、また、学生同士相談しながら、勉強し、月に一度日を決め、すべて集り、その成果を討論しあうのです。幅の広い、そして内容のある討論を年十二テーマ、十二回。つまり、休みは一度も無いわけです。その討論を通して、少しずつでも、自分なりに学問というものが分って来るでしょうし、また、その討論の過程の中で、新しいテーマを発見することも十分あるでしょう。そこにおいて先生という職業の二つの仕事――教育と研究――が、大いに発揮されるでしょうし、また、学生も学生らしい学生となるでしょう。しかし、共に、すなわち、学生も先生も、その場を何らかの形で逃れる様なことがあれば、一方は退学届を、一方は退職届を提出しなくてはならないことは、自明の理です。ただ蛇足ながら、我々学生の勉強したことが、先生方からすれば、ごく程度の低いものかもしれませんし、そういう意味あいで反論されるかもしれませんが、もし、そうだとすれば、それを少しでも、より良い方向へ高まらしめるのが、教育という先生方のお仕事の一つではないでしょうか。また、大学院生だから云々という論が出て来れば、何故に、そんな学生を、大学院という場に入学さ思たかということが問題になってくると思われます。＞というものを、私個人だけでも、そういう方向に持って行くべく、実質的な努力をした。とは決して言えません。また、そういう事を考えている多くの院生が一つの旗の下に集まり、共に努力したと。それ故、現在先生方から「君の、あるいは君達の言う、勉強への意志も情熱もなく、ただイヤだから云々」と非難されましても、ある意味では仕方のないことでしょう。

私は現代においては**ぜいたく**なのかもしれません。いや、こういう現代だから、思うのかもしれません。しかし、それはともかくも、私の、私達のもう一つの家を、たとえ内容的に違っていても、学問・研究という一つの共通のものを土台とした真の人間らしい交流の場としての、真の家にしたいと思っているのです。公私両面における素っ裸な交流から、先生方も含めまして、我々は、今どうすべきか、これからどうやっていかなくてはならないか、といった根源的な問いかけと実践が出て来ると思うのです。

さて話が、極現実的なものになりますが、現在冬休みも間近に迫り、学年末レポートが問題です。＜恐らく、先生方は、試験としてレポートを果たされると思いますので＞そこで、事前に先生方に御意見をお伺いしませんでしたが、本年度の先生のテキスト（教科書という狭い意味ではなく）を基に、自分でテーマを決定し、その事に関しまして、甚だ未熟は百も承知していますが、出来得る限りにおいて、まとめたいと考えました。そして、私は、先生の優しい不可の判定よりも、先生の厳しい御批判を望んでおります。それによって、次に何かまとめる時の参考となることが、必らずや見出されることでしょうし、大げさに申しますと、『大学改革』の一つの指針となるのではないかと考えております。

私の立場について

＜告発された者の自己弁明＞

ひとりの高校教師

——しかし、いまは語らねば
ならぬ事が余りにも多くて、
言葉のまずさにもどかしさを
感ずる。
すべてを語りつくせぬ時は
一人の実感を述べるしかない——
——山本義隆
『攻撃的知性の復権』より

私は**あの現場**にいた当時者として、何ともいえぬ自己に対するあいまいさを感じていたが、その心理的軌跡を発表する勇気を持てぬ弱い存在であった。

しかし、何とかして自己を確立し、論争し、憎悪し合っても、より一層の連帯性が生まれる「**場**」が持ちたくもあった。

状況は私に有利に働いた。

私も私の意見を、あらゆる党派的なものとは全く関係のない、一つの「**個**」として発表出来る機会を与えられた事である。

沈黙を守り通す事が困難な今日、いかに拙い文章であろうとも、はっきりと自分自身を位置づけなければ存在理由を喪失すると考えたため、これから述べる私の意見は、非常にまとまりのない、しかも文章構造上かなりの初歩的ミスを犯していることと思う。

そして、時としてはかなり「感情論」的な個所もあるだろう。

しかし、その点に関しては各位の厳しい批判を受けるつもりである。

また、私自身の体験が極めて少ないという事が、残念ながら、この文章の限界性を示している様に思われるが、その点も同様に甘受する次第である。

まず最初に、まさに我々はあの事件の「**当事者**」であり、かつまた高校生諸君のラディカルなコンテスタシオンを、素直に受けとめなければならない立場である、という点は確認されなければならないと思う。

被害妄想狂的な発想でもって高校生の行動を非難する人達は、『格子なき牢獄社会』と評される現代の社会が内在した矛盾——巨大にして不透明な「孵化器」たる体制の本質を全く関知せず、あの事件を非連続的なものとしてしか見つめておられないのではないだろうか？

我々は被害者ではない筈だ。

我々は「闘う教育労働者」という社会的評価に安住し、没主体的人間として、作られた状況の中で、沖縄を単なる合言葉としてしか使う事ができなかった。

しかし、現実の沖縄は、反戦思想の「**アルキメデスの力点**」として把握されなければならぬ性格を持っていた。

この感覚的断層を、勇敢な高校生諸君は、ものの見事に暴露してくれたのだった——我々の集会が、欺瞞に満ちた無意味なものであると。

余りのスマートさのため、参加しただけで、「我々は革新である」との気分に浸り、精神的マスターベションを行なった人にとっては、聖域的自己満足の場に対して狼藉を働く不逞の輩としてしか彼等高校生の行動はうつらなかったであろう。

その様な問題意識の低次元性からして、我々（高校教員、就中、府高教組合員としての免罪符を買ったもの）は「**告発された者**」と考える。

高校生の我々に提起した問題は、決して表象的に見るのではなくて、人間の尊厳という普遍的立場におりて受けとめなければならなかった。

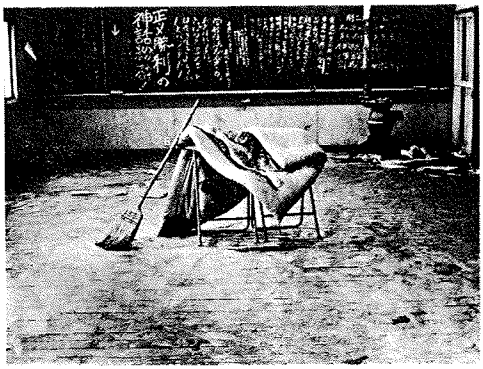
「カエレ、カエレ」のシュプレヒコールは人倫的意味においても完全に逸脱した行為であったし、しかも弱者の言語的暴力（——それを「**言論の自由**」と歪曲して考える人はあるまい）でしかなかった。

もちろん、あの絶叫を演じた我々の行為は、決して許さるべきものではない。

如何なる理由でもって、自己を正当化しようと試みても、その中にあるのは喜劇性だけである。

我々は、あの場にいあわせた者として、全く彼等の意見を聞こうとしなかったばかりでなく、数量的優位にたち、圧殺してしまったのだった。

結果論であっても、高校生諸君のあの



行動を一方的に責めたてるのは、我々自身の責任回避以外のなにものでもない。

はっきりといおう！「連帯を求めて、孤立を恐れない」高校生諸君の未来的視座（――民族解放闘争としての七十年安保闘争の把握及び方法論）が我々自身の「幻影」であった**革新性**を制したのだった、と。

次にあの集会の性質――所謂、セレモニー論に触れてみたい。

結論から言えば、「沖縄奪還集会」はセレモニー以外の性格は何一つ持っていなかった。アメリカ帝国主義という鬼神に沖縄人民を人身御供として祭壇に捧げた歴史的事実をまったく認識せず、原始宗教的な儀式として沖縄の蘇生を願い、「沖縄を返せ！」という加持祈禱を唱えたにすぎなかった。

しかも、非常にマス＝ヒステリックな状況の中で、沖縄の実体は霧散してしまい、権力闘争の場としての組合が祭主と化してしまった。それゆえ、プールに作られた「**奪還**」の緑の大文字と空の青さが奇妙に美しかった。

何故、私はこれ程までに議論するのであろうか？

それは今日の組合のあり方に問題があるし、その枠を越え得なかったわれら組合員にも責任がある。

つまり、組合に安住した我々は、闘争性を主体的に自己に転化するエネルギーまでも（抽象的）組合に吸い上げられた存在でしかなかった。

知的前衛というエリート性を克服して労働者階級の闘争の一環として、はっきりと自己主張をしなかった怠慢は、大いに反省すべきであろう。

つまり動員費として三百円を受領した我々には、真の自発的行為でもって平和を願ったとは決していいきれまい。（もちろん、私も同罪！）拒否すべきであった。

すなわち、「**全員集会**」と銘打ってもそれは主催者側の勢力誇示の手段であって、一人一人の組合員の発意ではなく、あくまでも、動員という命令的状況でしかあの「場」が形成されなかったところに、限界性があり、単なるセレモニーとしてしか意味づけられないと感じたのは私一人であったろうか？

教育の場に人間性回復を唱えるわれわれが、組織から大きく疎外されてしまっていたとは、実に皮肉なことであった。

私はもうすでに組織自体が体制内的存在であることをはっきりと自覚したし、**神話的「革新」**という幻想だけを信じて行動できるものでもない。

私達が真に平和を願うなら、七十年安保闘争に向けて、大きく第一歩を踏み出さねばならないし、対決すべきものはすべて否定せねばならぬ。

自分自身に対するゴマカシを戦術という美名のもとに隠蔽することは一切許せない。

人民として反政府的立場に立つならば否定するものに対しては決して妥協すべきではない。

妥協は権力側の懐柔であり、私達の敗北の論理である。

我々が生きている現代は、ギリシヤ時代ではないのだ。

ソクラテスは「悪法もまた法なり」と言ったというが、こうした考えは**人間の尊厳**を制度に従属させるものである。

ネオ＝ルネサンスとして果敢に展開される現代の叛乱は、まさに私達自身のものである事を知らねばならないだろう！

渾沌たる思想状況の中で、実像としての自分自身が、一体何処にあるのかサッパリ分らなくなってくる。

しかし、何かを希求し、実践し、打開していきたいと希う気持は、吐露したい。

矛盾しているかも知れぬ。

でも……。

尊大な管理者意識を浮彫り

ゲバルトの論理と抵抗権

結城光太郎著
（新潟大学教授）

自己の論理の破綻を認識できない

68年以降の全国的な全共闘運動の展開が「真理の府」、「学問の自由」幻想等の崩壊による「大学」の観念の根底的な動揺と（大学解体論の意味は？）変革があったのと同時に、「法」に対しても根底的な考察が要求されている。しかしながら悲々しく『法とは何か』とテーマが掲げられた雑誌「増刊ジュリスト」はそうした極めて現在的な混乱の中の産物のようである。しかも、その所収論文が、そうしたテーマにも係らず「法とは法だ」としか語って居ないのである。「民主々義は民主々義だ」の論理はもはや通用しない。崩された土台の上に何を建てようとそこには人は住むことができない。市民社会の深部から湧き起る運動は、その特徴としてより広範に〝神話〟を壊していった。袋だけを新らしくしてもブドウ酒は依然として古い。

ぼくたちは少々の関心をもって「法と政治」の項の結城光太郎新潟大教授の『ゲバルトのし論理と抵抗権』という論文を見る。その「題」がすでに、「法は法だ」という同義反復の視点しか持ちあわせぬことと、自分の足もとに火がつきながら、依然として尊大ぶってみせる管理者意識しか持ちあわせぬ教師の像を彷沸させるのだが。

構成は(1)人権と抵抗権、(2)抵抗権と機能、(3)抵抗権の史的環境、(4)抵抗権と自制、(5)大学におけるゲバルトと抵抗権となっている。この文章の中では「ゲバルトの論理」などどこにもない。〝上からの暴力〟に対する考察もなければ〝下からの暴力〟に対する考察もない。唯、非常に具体性のない、有効性のない、国民の思想の「位相」と「質」とも対応できない「抵抗権」なるものの阻雑な説明があるだけである。緻密な思考もなく、思想に対する侮辱、それに伴ない、抵抗権について語るとするならば、当然必要とされるその存在する社会＝世界に対する認識の方法の欠乏が見られるだけである。

「法とは何か」という雑誌の出版そのものは、現代的であり情況的であるということは三重的である。

様々に、権威も神話も、諸概念もゆらいでいる。しかしここで、ぼくたちは新潟大の教授の視座は何と〝堅固〟なのだろうと感嘆する以外に方法はない、この文章は古い皮袋をかた端より壊していく変革への志向―学問だけでも―とも無縁である。だからぼくたちにとっても無縁であり、批判的対象としても不毛のようである。

(1)人権と抵抗権において、氏はアナーキー的社会状況と、社会的牢獄状況のどちらにもならないようにするところに、抵抗を留保する理由があるとし、抵抗を権利として主張する場合、一定の場合政治を圧制であると評価し得る一定の価値的立場が必要であり、その価値的立場こそは、人権の原理であるとし、そして、「ジャコバン憲法」第三三条が、そのひとつの表現だとする。

しかし、アプリオリロ、アナーキー的社会状況と、社会的牢獄状況を措定できるものだろうかという疑問が湧く。ジャコバン憲法の思想の源流は、近代市民思想の〈自立した個〉が前提となっており、国家に、何を譲渡し、何を譲渡すべからざるかという問題の立て方であるはずなのである。

(2)「抵抗権の機能」においては、民主制は、人権保障のための制度であるから、抵抗権は、体制擁護のために機能し、非民主制の場合には、その逆の体制なのであるから、人権の主張そのものが体制変革を主張するものだというのである。すべての政体を民主制と非民主制に分け、民主制を日本国憲法で示されるような人権保障のための制度あるとし、その他君主制―プロレタリア独裁等はすべて非民主制とされる。こうした構成に納得のいかないのは当然でそれは先ず「カテゴリーを形成すること自体が、現実社会の構造との対応づけなしには無意味であるということ」によるのである。現実の社会に対する原理的な解明と、それが、具体的に、歴史的に如何に様々に現象し、機能するのか、という探究を行なわずに、更に、志向する政体の論題と過

去の政体をを同一に論することに対する疑問である。具体的な現象としての社会事象と抽象的、常識的、超（脱）歴史的考察と、理念的存在との三つを混同して考察したことも、ぼくたちに奇異な論理としてしか写らない一つの原因でもある。60年で〈民主々義〉が問われ、それへの超克が開始されている現在、この〝象芽の塔の論理〟はなんとしたことか。

次に氏は、憲法を「国民の法」と呼び政府（広義の政府）がつくる法を「政府の法」と呼び「国民の法」を「政府の法」の上位におくことから文章構成をしている。恣意的、観念的なこのような構成が何故許されるが、二つの法の分離がもしあるとすれば、せいぜい、前者が、人権の保証規定であり、後者が行政執行規定であると言えるにすぎない。しかも憲法に人権保障規定は含まれるだろうが、決して人権保障規定が憲法ではない。具体的な立法過程を、唯一度想い返せば容易に、そのような区別の存在しないことは明らかになる。憲法と、その他の法の立法過程の相違は、手続が、慎重であるか、そうでないかぐらいであり、法の形成における過程において本質的なちがいはない。

法律体系の上位にあるものと、下位に属するものとの間に矛盾を生ずることはあるだろう、理念的な、意識の共同旺の定文としての憲法を具体的な手続法規の間での、後者の適用過程において、様々に、この体系の逆転があらわれることがある。それを原理的に執念深く考察することを放棄し、実用的な「国民の法」政府の法」なる概念を、種もしかけもなしにとりだし、ごまかす方法、これが氏の言う「大学本来の場面においては、教官と学生との関係は指導するものと、指導をうけるものとの関係であり、決して対等なのではない」者のする方法なのだろうか。

従って、「国民の法」「政府の法」というきまな概念からの「力のたたかいを言葉のたたかいに置き換える抵抗権の制度化」という帰結は無意味であり、無論理性は「抵抗権は制度化しつくされることはないのであり、ここに抵抗権の本質がある」という氏自身の言葉で中ば証明される。力のたたかいの内容と、「言葉のたたかい」といわれるものには決定的な領域のちがいがある。

(3)「抵抗権の史的環境」においては、中世には実定法上の抵抗権があったが、十七世紀において国王の専制化が始まり、そして、アルトシウス、ロック、ルソー等の哲蒙主義哲学者の自然法思想の登場と十八世紀後半の独立宣言、人権宣言等の実定法化、それと市民革命の機会の成熟しなかったドイツの国家主義と、カント、ヘーゲルの観念論哲学による国家の絶対性とナチズムの根流、そしてヒットラー暗殺計画の抵抗の精神の評価、戦後のドイツの種々の憲法の民主的内容一方日本においては明治初期の自由民権論者と大日本帝国憲法（――その国家主義）そして、その「明治憲法体制はみずからひきおこした無媒な戦争によって滅び、人権原理に立脚した新らしい憲法が誕生した。」と述べ、憲法第十二条の「不断の努力」のなかに抵抗権が含意されているとしている。

単に抵抗権という型で抽出することがどれ程無意味なことか、それがとりわけ歴史的に述べられる場合、如何にも虚しい作文にしかならないという見本のようである。カテゴリーの形成が現実社会の構造との対応なしでは無意味だということが繰り返し思われ、しかも、現実的な氏自身の立場と文章の関係が、歴史と文章の関連に酷似しているとも言える。この文章では、中世から叙述が始まっているが、ロック、ルソー等の思想家が思想家として必然的に登場した所以であるところの中世共同体の崩壊と市民社会の形成の論理がないが故に、人権にしても、抵抗権にしても、こうした型では決して、現代的課題にとって有効な内容も、歴史的な社会的内実を得ることがない。カント、ヘーゲルの思想に対する無理解と、思想そのものに対する不遜としてのみ表れ「現実が思想に近ずく」どころか「思想が現実に近ずく」ことさえない。ヘーゲルが如何にその現実の対象との格闘と、そして、市民社会の崩壊の必然とそれを止場するものとして国家を措定したことが一切理解されていないのである。それでは、ブルジョア民主々義国家の国家と個の矛盾の問題をどうたてるつもりなのだろうか、それが現象として〈抵抗〉としてあらわれるのだろうが抵抗権を観念的にどうひっくり返してもどうなるものでもない。ヒートラー暗殺の計画の評価にしても、それが単にテロル及至クーデターとしてのみ存在したのであれば、人民の解放の忠想などとは全く関係のない次元の問題になってしまう。それが戦後の憲法の抵抗権の実定化の源であるなどとは、どう根拠づけられるのか、さっぱり判らない。それよりもどうして、ワイマール憲法が空洞化から、放棄せざるを得なかったのかという問題には何ら答え得ない、また、もし法体系を「国民の法」と「政府の法」と区分するならば、どうしてそのたてまえの「国民の法」が上位であるべきものが実際には、しばしば逆転するのかという逆立の論理こそが、先づ、何よりも先に答えられなければならない。

(4)、「抵抗権と自制」で氏は「秩序ある抵抗権」を措定し、アナーキーになることを極度に怖れ、抵抗権の行使に「自制」を求める。この「自制」は「不断の

努力」と矛盾しないだろうか。「自制」を「先づ、裁判所に申し立てることである」と理解したとして、「立法阻止を実力でするようなことは『原則』として許されない」とする「原則」が、「政府が悪性化し、人権の核心を侵害し、民主々義の根幹を傷つけるような立法を強行しようとする」場合には実力行使を是認せざるを得ないと言って居るのは何をか言わんやである。「政府の悪性化」は如何に現象するか、何が「人権の核心を侵害し、民主々義の根幹を傷つけ」るのかは、先づ次のような事を仰えておく必要がある。ぼくたちも措定し、一般に考えられ、現在的にも、世界各国の憲法に存在する抵抗権にしても、それは近代市民社会を前提としたものであり、そこにおける国家はレッセフェール的国家であり、自立した「個」の自由競争が先づもって前提とならなければならなかった社会の産物であり、「国家」秩序が前提の「自制」は意味をなさないのである。市民社会秩序が前提となり、そこからある種のものが国家に譲渡(Veräu Berung)される構造から生まれたものなのである。

(6)「大学におけるゲバルトと抵抗権」においては、この抵抗権について、デタラメな考察を経て来た「ダイガク、キョウジュ」があたかも水風呂につかっていながら、ぬる風呂につかっているかの如く、御自身につきつけられた問題を一事も啄みとることもできず、「不遜であるか無責任に」弁じている。先づ、『抵抗権の法理』から『ゲバルトの論理』をみることに問題がある。ひとつにはせまい領域からのまた、位相も全然ちがう、全く見当違いの評価であり、また氏の言う抵抗権の法理そのものの空虚性は、現実とは何等係われないことを示している。

また、大学が、社会から、全く遊離して存在していると考える歴史的にも事実的にも、原理的にも背反する考えがあること、国家の上からの統制、再編は、少し考えれば誰でも判ることである。氏が例にあげた「登録医制度」の問題にしてもそれがどのようにして発生するのか、「事実であるとすれば」などと馬鹿げた事を言っているが、もとより「単なる事実が問題ではなく、そのような現象の発生する根拠と現象との関係を明らかにすることが科学者のやることである。しかもその問題の普通性を解体さるべき大学人としても自身で何も促え返せないのだ。当局がはっきりしないから、こじれたとか、「勝ち抜くために一種の理論をあみだした」とか「理論を立てなければもちこたえられなくなったのだとみることもできょう」などとはアキレテものも言えぬ。一体理論は何のためにあるのだ、理論がなくて闘争に勝利できるか、闘争（現実）と全く無関係な理論など理論ではない。現実社会と関係のない学問のやりすぎがこうい馬鹿なことを言わせるのか。

氏は、学問、研究、教育の歴史的、社会的また、あるいは文化的意味においてさえも何も語らず、語り得ないながら「学問の研究教育という大学本来の場面においては、教官と学生との関係は指導するものと、指導をうけるものとの関係であり、決して対等なのではない」という。68～69と二年に渡る全国的な学園における全共闘の登場が、しぶとく、大学（＝市民社会）に根在するひずみをつき上げている時、指導するもの」であり、「決して対等ではない」ものが逃亡してしまったり、政治的一面的対応のみであったり、とにかく、全共闘に正面戦を排めたのは――実際にそうだったのだが――唯一、異様な国家「ゲバルト」の機動隊だけだったということ、何よりも先ず確認されるだろうと思う。

× × × ×

ぼくたちは、この結城氏の文章中で、この間の混乱の中で、混乱を混乱と認識できず、最も権威的にふるまって来て、最もその権威などボロクズのように崩しおとされた人（たち）を見る。

(1)～(4)の文章にしても、それが抵抗権が柚の文章でありながら、その生成の過程も、本質論も、現実的な抵抗権も存在しない。

ゲバルトに対する考察が貧弱すぎる。これなど、自分がおどろく程の暴力を行使しながら気づいて居ない、長年つちかわれた〝不感症〟は、おそろしい。意識しないで、大それた事を平然とやってしまう。

右の事は次の問題を真執に探究することによってぼくたちの前に有効性を持って来るだろう。

一、近代市民社会の形成の論理、考察

二、一の止場としての国家の形成の論理、に対する解明

三、国家の属性として現象する暴力、あるいは、不法として法を創る暴力と、法と一体化した暴力、また支配者を「侵す」ことを被支配者に禁じているタブーを打破する〈暴力〉に対する考察。

いや、これらの現代的課題を〝問う〟ことを氏に期待することあたかも〝南の島に雪が降る〟のを待つに等しいだろう。これらの課題については、我々の世代が解明していくことが必要だろう。

山根　瞳
（法学ゼミナール会員）

新刊・旧刊

《近代》の断罪

F・ファノン著作集「革命の社会学」

（一）

F・ファノン著『革命の社会学』は、〝第三世界〟の被抑圧者の階級性の展開、力学＝軍事過程、であります。〝第三世界〟の革命的闘争を〝解説〟するのではなく、革命的闘争の巨大な無限のエネルギーの暗黒の地帯からの〝発条〟、世界化への闘争の質的転化を要請し、その方向性は現下の階級闘争との関係で展開していることに特徴があります。

展開の中心軸は、新世界への創出への、アルジェリア革命を上部構造＝政治的措置の鎖連への否定の運動の進展を支える下部構造＝被抑圧者の生活（家族関係、社会的階層）の変革運動に著者の視点があります。

著者F・ファノンは誇かに観点を述べている。「アルジェリアの土地に新しい社会が生まれたことを示したい」（P6）

例えば、アルジェリア女性はヴェールをまとい、或いは医師を撓ねつけ、或いはラジオを受け入れようとはしなかったという生活事実をとりだしています。人々、とりわけ西欧では〝彼ら〟が遅れている＝〈近代と前近代の対立〉＝と断定した。著者はこの固定的単純な公式の誤謬を露にする。〝彼ら〟＝アルジェリア人＝は独自の方法で、力を尽して自己の文明を防衛していたのであり、文明とは、何よりもまず帝国主義の秩序に抵抗することであり、次にはあらゆる犠牲を払ってでも帝国主義を葬り去ること、〈近代の断罪〉にあります。彼らの抵抗の力は革命的闘争へ注ぎ込み、この運動の展開それは、女性の社会的かつ性的な二重の抑圧、司祭者を頂点とした家族関係を、自から暴露し、否定、変革し新たな異質な共同体へ、それは歴史のプローグである、と述べる。

（二）

〈近代〉それは生産力の飛躍的発展にささえられて大きく構造的に変動した時代ではない。無数の死と深い罪責の累積を蔵して、暗黒の地下より激成し、永久に爆発する活火山の出現の現代である。

「拷問するヨーロッパ国民は堕落した国民であり、その歴史を裏切っているのだ」（P6）との告発は、近代の恒常的暴力体系＝未曽有の権力と収奪機構への隷属の拒否である。いや、神話、幻想と靡爛の都〝バックス・ローマーナー〟への死の宣言である。近代＝真の個体的自己獲得を志向＝の現実的視点の欠落、それは頽落、廃墟の暴力的維持でしかない「近代」の虚構性の暴露である。

近代、それは本来人間が共に生きるべく定められている本源への回帰とそれが故に希求されるべきその定めの未来的成就の希望によって人間が類即個として、真の自己の獲得への現実の否定、変革とユートピア＝新世界の創設への実践の時代である。しかし、〈商品〉＝資本主義によって解体されている時代である。一方、これへ死を与えるべき永久的闘争の時代である。

「銃を手にすること、民族解放軍の一員になるということが、アルジェリア人として自分の死に意味を与えるのに残された唯一のチャンスである。支配の下での生は、ずっと長い間その意味を喪失させられていたのだ」

（三）

キューバ革命、ヴェトナム革命は、階級闘争の質的変化を如実に示した。レーニンのテーゼー〝革命的理論なくして革命運動なし〟＝とは逆に革命は理論＝前衛党の指導をもたないまでにはじまりそしてその革命は成功した。これは大衆闘争が自然発生的に自己の内部に自分から独立した運動形態をつくりあげる諸条件をもっていることを示しているといえます。

F・ファノンはアルジェリア闘争を次のように規定する「他の多くの植民地国では一政党によって獲得された独立が、徐々に民衆の間に民族的意識を与え、拡大していったのに反して、アルジェリアでは、民族意識、悲惨、集団的テロがまず存在し、それが人民による運命の掌握を不可避なものにしている」

そこにアルジェリアの革命闘争の新しい世界の構築への質の高さ、普遍性を見出すだろう。現在の状況へ密着し、介入し、直接的に闘争しなければならない。それは内的矛盾を譲化し、醗酵してゆく

ために。しかしそれは現在性によって規定されている。

「アルジェリヤ国民は、もはや未来の空の彼方にあるのではない。それは阿片常習者の想像力の産物でもなければ、幻覚のよせ集めでもない。それはアルジェリアの新しい人間の中心に位置しているのである。アルジェリアの人間という新しい本性が存在し、その存在に対応する新しい次元が生じているのだ」（P11）「今はまだ、人間が一国の市民となるべき権利を獲得するために闘い、死ななければならないような時代であろうか」（P12）「アルジェリア人にとって自分の生に意味を与えることはもはや問題でなくなり、自分の死に意味を与えることが問題となったからであります」（P15）〈死〉をもって〈生〉を超克する。この矛盾的な超克。

個体であるかぎり非連続であり、それが無化して〈死〉へと問うときそこに連続が現われる。〈死〉＝〈暴力〉は人間存在にとって根源的なものであるにもかかわらず存在理由を否認、いや誤解されている。

革命への死、戦闘、それは抑圧のなかで蓄積してきたすべてのエネルギーの昇華である。現代兵器を装備したフランス帝国主義軍隊を軍事的に敗走させたのは、山岳ゲリラ、解放軍ではなく、〈死〉をもって〈生〉を超克する無限のエネルギーであるといえよう。

アルジェリアの革命的闘争は、被抑圧者を個人として強化する。これは、革命的情勢が革命的危機に転化するための主体的力量の成熟であった。組織者＝教育者＝煽動者＝戦士の役割を機能分化し、固定化＝官僚化するのではなく、同時的に果すべく解放軍の形成であった。被抑圧階級の「集中され組織された社会的暴力」が資本主義的な生産関係をうち砕き、新しい社会的＝生産的結合の体制へと編入する力であり、内部へも向けられる。諸個人の無限の主体的営為の可能性への追求、それは新しい過渡期への転化を世界に告知する。

被抑圧階級の権力奪取は内外の激烈で、執拗な反革命をひきだすだけでなく、根底的な新しい異質の闘争に直面せずにはいられない。革命的闘争の全面性は、被抑圧者の内的変革とともに、新しい形態での階級闘争の継続＝永久を保証する条件を獲得しなければならない。「革命の社会学」はこの課題＝アルジェリヤの革命的闘争は、これまで経験したことのない「未知の新世界」の創造への原則的闘争であったことを、展開させている。

その一、「アルジェリアの声」は、レーニンの全国的な政治暴露の一つの〝流れ〟→大きな統一的闘争の形成＝全国的政治新聞の創設を想起させる。それは分散的、個別的闘争を、一層尖鋭で持続的なもの、被抑圧者の自己教育＝批判的能力を培養し、系統化し、運動能力の培養、強化であって、これは全人民的闘争へという構造の変化である。「アルジェリアの声」は依拠する権力への真の共同体への転換のための闘争である。

「占領者の声はその呪縛を解かれたのだ。民族のことば、民族の言辞が世界を革新しつつ世界を秩序づけている」（P68）アルジェリアの言葉は空間をも占拠した。

〝アルジェリア戦争は、一国の民衆が植民地抑圧を絶切るために行なっている最も幻想的な戦争である〟（P5）

（四）

我々は、普通〝第三世界〟を想起する場合、地理的、人種的、時間的な違いを〝断絶〟的に感じるといえましょう。しかし、これは〝ローマーナー〟の政治的・経済的・思想的措置なのだ。我々はこの外被を爆破しなければならない。F・ファーン「革命の社会学」は外被の爆破への最も尖ぎすまされた武器である。だけでなく、第三世界を通し、現代世界の階級的課題と、したがってその歴史性とを凝縮度を内包して生々しく刻み込んだ武器といえます。

（みすず書房刊）

T・Vのホームドラマの小説化

庄司薫著 赤頭巾ちゃん気をつけて

一口に言って大麥私達と密接した小説である。身近で親しみを感じると言える。それは、この主人公の薫くんが高校生であるからかも知れないが、何よりも現代の小説だからである。

私は小説を読むのが好きで特にドストエフスキーなんかをいいと思っているのだが。でもそれを読んでいると今の現実の自分とのつながりを何ら見い出すことができないのである。ただストリーを追って読んでいる私にとって、そのストリーに溺れてしまって、何らほかのものを見い出しえないでいるかも知れないが……。

この小説を読み出して何か今まで読んでいたものとちがって、ひきつけられる

ものが感じられた。現代小説全般に言えるのかも知れないが。

この主人公である薫くんは、大人が作った創造物的人間を思わせる何を見るのでも、いわゆる理解があり、高校生の気持はわかっているんだと自己満足におちいっている大人である。だから高校生がやっていそうな事、考えそうな事、を盛りだくさんに薫君につめこんでいる。どっちつかずでノンポリ的存在にしている。小説中の言葉なら、ジャカスカ女の子をものにしているようでもなく、彼の言う革命派でもなければ、芸術派でもない。水前寺清子といやったらしいメロドラマ（もっとも私は大嫌いだから）が好きな、そうかと言ってシエークスピスとゲーテの好きな男の子である。私は小説の中の薫くんをホイホイとうまいこと生きている人間と呼びたい。

だってそうではないか、唯だって東大へ行けるほど頭がいい人ばっかりではない。今の高校なんてものは、受験体制そのもので、それを教師と、そして盲目的に受験勉強に身をやつしている生徒とが一体となって作り上げているんだからどうしようもない。そこで必死になって勉強したって、そうやすやすと東大へなど行けないんだから薫くんなんていうのは、そこのところの現実のせちがらさというのがまるでわからないように思える。

私のように、いつも成績について劣等感をいだいている人間にとって、本質的には問題にしないよう考えているのだが、やはり、○人中○番とランクづけされ、教師から、将来の希望は？大学へ行くんだったら、こんな点では、なんて言われたりしたら、やはり考えてしまう。旧比目谷高校のような、薫くんのような秀才ばかりではないんだ。今の高校ってところは人間味なんてあったもんじゃないんだ。教師も、先徒もつねに心の底では、点数にこだわっているんだ。そして大学受験に。さらに薫くんの家庭はあまりにも問題がなさすぎる。まるでテレビのホームドラマに出てくる家庭みたいだ。ああぞっとする。お手伝いさんがちゃんといて、自分の部屋をもっていて、家には応接間があって、金銭的には不自由なく、親はあまり干渉せず、話せる兄弟がいて、友達にもめぐまれて、女の子にも不自由せず……。なんてまるで満たされている。世の中がこんな人ばっかりだったら、そりゃ窒みも、戦争もおこらない世の中になるだろう。こんなに満されきった人間がいる事、事態腹だたしい。（もっとも近頃は何に対しても憤りを感じているのだが……）

たべものが満足に食べられなく、空腹であれば、気持がイライラする。それがまして貧乏なために、銀行や資本家のところでは埋まっているあの札束がないばっかりに人間の心までが、卑屈になり陰険になったりする。お金のために大学へ行けなくむりやり企業へ働きに行って、肉体的かつ精神的に消耗しきっている人だっているんだ。

高校の矛盾だらけの今日の教育に高校生である私達が立ちむかっていくならばわっと家族帝国主義がおそいかかり、社会に対して目を向けようとすれば、政治活動は禁止するなんてナンセンスなことを言われる。こんな現実は、この小説ではまったく無視されている。て感じがするんだ。何か地についていない机上の空論的な感じが。薫さんみたいに自分の立場自分の位置を確認している人間なんていないと思う。自分をお行儀のいい優等生で許し難い俗物で、鼻持ならぬ体制エリート候補で、将来を計算した安全第一主義者で、いい子になりたがる俗物で時代おくれのスタイリストで、非行動的インテリの卵で、保守反動の道徳家で etc etc etc…そして、乱痴気パーティやなんかにさっさといき（私だったらそんなパーティ自体否定するのだが）誰でもいいから女の子を強姦しちゃいたくなることが一日に最低二度ぐらいあり、毎朝満員電車の中で痴漢すれすれまで行くがそれはスレスレで止まる。そして、ゲバラの大ファンで、毛沢東のすごさにはもうお手あげで、ホーチミンには、「ザ・タイガース」のファンの女の子的感慨を抱いているし、それからマルクスときたら、これはもうほとんど愛しちゃっているといっていいくらいなのだ。という所からして相当人間的な感じがする。そして最後の方に「彼らはほんとうに自分の頭で、自分の胸ですべてを考えつくして決断したのだろうか。誰からの借物でもなく受売りでもない自分の考え、自分だけの考えで動いているのだろうか。彼らはその決断と行動をたんに若気の至りや春青の熱い血の騒ぎや欲求不満の代償として見殺しにすることなく、つまりは一生挫折したり、転向したりすることなく背負い続けているのだろうか」これは、活動する人達をするどく批判している文章ではないか。私自身の事を批判されている気がする。最後の部分で小さな女の子の登上は薫さんにとってものすごい意味をなす。つまり赤頭巾ちゃんなんだ。私の今の現状として、出あう前の彼の気持とよくにている。今の社会そのもののような気がする。私にも赤頭巾ちゃんが必要なのだ。この現体制にも。そして彼のように焼きたてのおいもみたいにホクホクホカホカした気持になりたい気がする彼のように「誰のものでもないこのぼく自身のこんなにも熱い胸の中から生れたものである限り、それがぼくのこれから、の人生で、このぼくがぶつかるさまざまな戦い、さまざまな苦しい戦いのさ中に必ずスレスレのところでぼくを助けぼく

を支えぼくを頑張らせる大事な大事なものになるということがはっきりと分ったように思えたのだ」何か人間の生き方を少しでも、暗示しているように思える。しかしそれは、割合エリートで育って、若くして芥川賞をとれ世にみとめられた小説家として庄司薫の場合であり、私にとっては何が理想だけに終わって、少し非現実的な感じがしないこともない。

しかしこの小説は大変好きであり、私にとって何かホクホクしたものをあたえてくれた。

（山下則子　千里高校）

（中央公論社刊）

〝産軍複合体〟への警鐘

「国際資本戦と日本」

江夏美千穂

（一）

この著作の興味は、資本主義と戦争の関連を問うている点にある。この課題は、資本主義社会の成立と共に常に解明されるべきものであった。同時に、この著の狙いは現在の流動する国際情勢の解明に一つの素材を提供することにあるといえるだろう。著者の姿勢はかくの如きものである。即ち「カルテルはなにものをも安定させない。それは、特定のときには存在する大生産者たちのあいだの関係を、たんに記録するにすぎない……カルテルは、まず経済戦争の終局的には射ち合い戦争の、完全な培養場となる」（サスリー…ドイツ最大の〝化学王〟＝ドイツ最大の化学カルテルI・Gファルベンのすぐれた研究者）という観点、見解をためなおし、実証することである。この観点、著者の分析意図は、究めて、現実的であり、戦後の資本主義観、その論争にも一つの批判姿勢を内包しているといえる。

〝戦争と経済〟＝産軍体制といわれる帝国主義の腐朽性の解明は、戦後の一つの人類史的課題であり、同時に階級的に解決を要求されているという本質的なものをもっているといえよう。この点著作の中にも様々の実証とその歴史的事件の諸関連において散見しうるものである。

〝戦争と経済〟といういわば常に全人類的に確認され、歴史的に二度の体験という形で実証されたにもかかわらず、第二次大戦後の歴史過程は、〝繁栄する資本主義〟と「平和共存」の下に、戦後体制に関して一つの定型化された価値観を培かってきた。だが、その傾向、徴候も、最近の流動する情勢の中でくつがえされ、再び〝戦争と資本主義〟〝帝国主義と戦争〟の課題が全世界的な規模で問われるようになったことは否定出来ないことである。

（二）

著作の展開は次の如くである。Iベルサイユ体制下の国際資本戦　II休戦組織ヤルタ体制（国連主義）の矛盾―戦後から一九五〇年後半まで―　III激動する国際資本戦―一九五〇年代後半から七〇年代へ　IV〝中国封じこめ〟政策のパートナー、日本という形で。

この展開形態でも明らかな如く、I・II・IIIは、全世界的規模に渡る形での〝国際資本〟の〝戦い〟を歴史過程に測しながらその時々の政治的焦点の意義―戦争の不可避性―を問いつつIVの項で、その様な歴史過程に規制される日本の政治方向性への批判を展開しているのである。

著者の分析内容は、カルテル：資本戦の〝根拠地〟の形態との関連でいかなる〝戦い〟とそれに規制される〝狼たちの握手〟（P28）としての政治内容の資質を問い直していることである。即ち、著者の〝資本戦〟とは〝カルテル〟の戦いであり、石油資本を軸とした重化学工業、原子力産業、宇宙産業の〝戦い〟を展開している。そこには、第二次大戦を、〝狼たちの握手〟としてヤルタ体制を生み出し、〝第二次大戦後の休戦体制は、準戦時的ブロック間の休戦―いわば〝狼たちの握手〟―を原点にして成立したものであり、したがってたとえ歯止めであろうとも蚕食をうける可能性が本来的に存在しているということ〟（P28）として戦後世界体制を規定して、戦後政治の矛盾の深さを課題としているのである。その〝深さ〟の質は、第一次大戦後において、〝ドイツ〟を軸とした国際政治のあり方が、第二次大戦のそれが、中国を軸とした国際政治の異質性と同質性にあるという姿勢の中で戦後政治のあり方への批判としていかなる異質性を帯びているかに大きな課題を提供しているといえる。〝政治〟が、常に異端国を生みだしそれへの拮抗関係の中で、階級的課題を推し進めるという相関関係は、日本政治のあり方にしてもあまりに妥当しているといえよう。著者の指摘―「七〇年代の幕あけは、〝自主防衛〟下の国際資本戦ではじまるにちがいない。そして、この資本戦はやがて、日本の武装器庫をおそるべき核兵器で充満しつくすことになろう。そうなれば、ヤルタ体制（国連

主義）、したがって、政策が、確綻の道をすすむだけに武器庫は昂然と、自己の威力を主張し始めることになりかねない。（P206）―は決して単なる危惧以上のものが現実的に迫っていることが、この著作の実証的帰結であり、現実の動きの中にもそのことは充分うかがい知れるだろう。

（三）

この著作は、警鐘の書でもあるが、反面、国際資本戦の国際的形態の恐ろしさとそこから生み出される政治的課題は、人間の恣意を超越して生起してくるが故に、人類に対して〝資本戦〟の意義を今一度反省し直すことを訴えているともいえる。経済の成長がみにくい〝狼たち〟の戦いの結果にしか条件づけられないとすれば、それは、一民族だけの盛衰を決めるものでなく、まさに全人類的課題との関連で処すべき内容でもあるといえよう。警鐘がむなしい響きに終ることなく、現実の地響きとはねかえることが必要とされているといえよう。著者の展開内容からも明白であるが、アメリカ、ヨーロッパの政治的矛盾の累積が、〝産軍複合体〟という経済体質に枠付されたものとしてあるとすれば、日本の現在進まんとする道は、まさにその〝産軍複合体〟である。その時点における政治のあり方がどの様な矛盾、国民への課題を提供するかは、眼にみえすぎている。それは、先の著者の指摘を待つまでもないことであるが、〝産軍複合体〟体質をいかに国民複合体の社会へ転換させていけるかは今後の大きな課題として差し迫ったものとしてあるだろう。（岩波新書）

（庵谷寿男　生協専従）

物価における「政治」を追求

経済生活を動かすもの

―常識的物価論を是正する

鎌倉　昇　著

（一）

物価問題に関する見解ほど一見百花撩乱の傾向はない。その〝傾向〟が強いということは、まだ物価問題に対しての現実的な政策、対処、処方箋を捜がしかねていることのあらわれでしょう。この著書の特徴は、このような「傾向」への批判であり、物価を価格としか考えない人々への素材提供といえます。「物価問題」とは、生産性の向上に基づく所得再分配との関連で、経済法則によるものと政策的内容によるものとを区別して考えていくべきだということを提言している著書といえます。

確かに、私達は「経済生活」の実像を「むかしといま」との関係でとらえる傾向が強いといえます。日本経済の全体の動きと、その政策的措置との関係で把えるというより日常的動き―家計簿なりその他―の中でしか物価を考えていないといえます。だが、それは、また、戦後日本経済の変化に強く刺激されて、なかなか全体がみえないメカニズムをもってきていることも手伝っているようです。例えば、米価、あるいは土地価格などの例証から教育費に至る各々の価格上昇のメカニズムは、決して全体的に把えにくい要因をもっているだろうと思います。この著書は、その様な条件を充分ふまえた物価像への啓蒙を推し進めているといえます。「常識的物価論」とは、まさに価格として比例上昇現象としてしかみないものへの批判として展開されているといえます。

（二）

この本の構成は、次の様に展開しています。①成長経済のなかの物価問題、②統計にみる物価上昇の実態、③食料品の価格はなぜ上がる、④物価上昇の原因を探る、⑤物価上昇は抑えられるか、です。①②は戦後日本経済の変化による物価問題の大要とその傾向、③は、政治と結びついた物価問題の政策的誤りとその問題点、④は物価上昇の原因に関しての様々な見解の展開、⑤は物価上昇に対する政策のあり方としての内容構成です。この様に、この著書の展開特徴は、日本経済と物価という形で焦点を設定して展開していることにあります。

その焦点内容の中心軸は、様々な価格内容―米価・冷凍食品・砂糖・理髪・銭湯―の具体的事例との関係で展開していることです。それは、いわば常識的に語られている日本経済の二重構造といわれる下部構造の物価に焦点が与えられています。それはまたこれらの〝物価の特徴〟が政治とのむすびつきを主要なものとしているということです。それは、また、戦後日本経済の発展が、重化学工業中心の内容であったものとの関連で、下部構造としての政治的措置の関連で物価問題が日常化してくることを教えているのです。そのことはここで、展開している課題が、即ち、著者の提起しているそれへの解決方向があまりに日本政治の核心との関連で問われるものであるが故に著者の日本社会における経済政策のあり方にどの様な前提をふまえているかの課題として論争される余地があるといえます。

それは、既に、日本経済の「物価問題」が日本経済のみとして規定しえない内容をふくんでいるといえます。

(三)

著書の内容は、極めて具体的です。その〝具体的〟内容とは、政治との関連が様々に〝物価〟―価格の決定にからみつくことがあればこそでしょう。だからこで教えられることは、物価上昇の要因の中で〝政治〟の中味がどれほど巧妙に絡みついているかということです。それは「物価上昇」という常識を、単なる常識で、はかりえない経済機構のあり方を検討しなければならないことでもあります。

それは、戦後日本資本主義の構造転換に基く政治内容の質が問われているといえます。それが、戦後日本の二十年後の姿としてとりわけ「物価問題」への百花撩乱の傾向を生んでいるといえましょう。物価問題と政治の絡みつきは、端的に「米価」にあるといえます。それは、あまりにも日本的傾向、保護政策の結果が、日本経済の成長のあり方、発展のあり方にも問題が発生しているといえるのです。それは、「政治」というものの本質が、経済法則との関連で、日本の場合かなりの問題点を社会的な関係においても問われているといえるのです。この著書の中で明白なことは、日本経済の戦後の発展が、あまりにも保護的、閉鎖的であったこととといえます。その事は、物価問題の中に象徴的に表われているといえます。物価問題が様々な問題として発生する要因は、ここにあるといえましょう。ここでの内容の限界は、この政治と経済メカニズムの矛盾としてあります。

この問題点との解決は、開放経済体制の中での日本経済の動きの中で、試めされる課題といえます。そのことは、一層物価上昇への対処の方法が、今後も大きく残された課題として残るでしょう。それは、今までの日本経済の中での物価問題から世界経済との関連の中での物価問題へと課題は転化します。それはまた、日本政治のあり方を今一度問われることにもなるでしょう。（講談社刊）

（**庵谷寿男**　生協専従）

編集後記

〝書評〟誌の月刊化のスローガンにもかかわらず、やっと10号を発刊することができた。

70年代の動向を決めるであろうこの年は、万博あり、安保ありで、昨年以上の激しい世界の動きがあるであろう。自主防衛の中で国際資本戦が熾烈になってくるであろう年に、学生、労働者の闘いも熾烈なものとなってくるであろう。それにより、〝国家〟の矛盾が増々バクロされてくるであろう。

「書籍」というコシュニケーション媒体としての形態が、比較的自由な内容の思想伝達手段としての可能性をもつ故に文化学的活動には欠かせない必須物資、基礎物資であることからして、書評の持つ意義はおのづから定まってくる。

それは思想の追求である。

〝思想の追求〟で何らかの成果が得られると思うのは早計であろうが、何かのプラスになればそれでよいのではないか。本誌が、そのための〈環〉としてささやかにでも役立てば幸いである。

最後に、寄稿された方々にお礼申し上げます。